

ふみこ句日記

2000/5/51

はじめに

昭和四十八年九月浅野房子さんと三朝温泉への車中、山下光子に出会ひ三朝の病院に療養中の大塚さんを見舞う旅だったが、話は吉川美佐姉のすすめにより京鹿子火曜教室に浅野さん 小田澄子さんが入会

九月初旬会に出席した様子だった。私も一か月おかれて 十月よりともかく出句した。

造る書くと言うことには全々自信のない出発だからあまり進んだ気持ちでは」ななかった。以来 もう止めるを繰り返した。美佐さんへの義理を続けていると言った。

そして十八年の年月が過ぎた。納得のいく自分の句句は殆んど無い。

個人で句集を作られた句友も何人があるが 火曜火鏡 合同句集の仲間入りが精一杯のこと、それ以上自分の句を活字にのこすことは考えてもいなかった。けれどここ数年前から句日記として 整理してみようと思い立った。下手、句になっていない句 それでよい。思うばかりでなかなかとりかかれないで 二、三年は過ぎた。

今回 玉造温泉 厚生年金会館 保養ホームに入所 山下さん 悦子さんと合流するまでの一週間 一人の機を得て漸く一頁をかき出し始める。振り返り見る十八年 記憶確かでないものもあるが思い出は楽しい；

第1章 野仏

吉祥会で大森先生 池永先生と一緒に当尾の石仏を巡りて
紙魚^{しみ}

野仏の笑ひ在せり曼珠沙華

「草紅葉」兼題 幼き日の思い出

日を浴びてままごとの子や草紅葉

「顔見世」 去年は文友会で顔もせに。今年はまだ思い出のみ

顔見世の名残を夢に見しも去年

お隣の浅野まゆみさんかわいい日本髪で

髪結ひて寝ず娘は待つ初詣

相川北通りの家根笹の中で狂い猫

49
・
1
・

48
・
12
・

48
・
10

48
・
8

猫の恋根笹の乱れ昨日今日

49
・
2
・

上京の車中 浜松あたりで遠連山をみて

山の色幾重の果の雪解光

49
・
2
・

野仏の笑ひ在せり曼珠沙華

48
・
9
・
0

「水草生まふ」 兼題 日浅い私には大変むつかしい。ふと一善の車で探梅につれてもらった時
賀名生 だったかそして仁徳陵ところを走ったことを思い出す。

陵の薄陽の濠も水草生ふ

49
・
3
・
0

「春の雪」 兼題 直子さんの縁談がまた立ち消えた。

娘の縁談又もこわれぬ春の雪

49
・
3
・
0

一つの旅を終えりとまた次に心は走る。

花過ぎぬいづこともなき旅心

49
・
4
・
0

「桐の花」 兼題 小森田さんとあわくら荘に 帰りは姫路までバスにした。

山裾の雨に煙れる桐の花

49
・
5
・
0

「草の花」 兼題どこで得た句かはつきりしない。

野仏の顔かくすまで草の花

49
・
9
・
0

山下さん 小森田さん 青山さん 四人連れ 児玉東洋さんの車で佐多岬 桜島 霧島と廻っていただく。
別れて高千穂の国民宿舎に泊った夜 高千穂神社の夜神楽をみに行く。

夜神東の明りに映ゆる銀杏黄葉

49
・
11
・
0

「炬燵」兼題 一人暮らしの私の句だと浅野さんの御主人がはやす

置炬燵向ふ人なきあで蒲団

49
・
11
・
0

「年用意」丹波から週二回野菜その他を積んで車が来る大塚「きく」の前でとまる。

大塚ののぶ子さんが電話で「丹波よ」と相川の店へしらせてくれる。

年用意丹波男の荷は売れ早き

49
・
12
・
0

小森田さんが名古屋から夕方までに相川へ着く筈になっているのに遅い

友待つに暮色刻々粉雪舞ふ

50
・
1
・
0

上京車窓より。

風ぬくき末黒野鳥群をなし

50
・
2
・
0

私は化粧水は使っていないが ふと出来た句

化粧水掌に冷えのなし春隣

「花曇」野崎詣りをしらの去年だったかと思う。

綿菓子も売れて野崎の花曇

花曇年甲斐もなき物忘れ

この様な軽やかな心に時もある

若やぎて夏来る歌口ずさむ

相川の家の軒に雀がいそかしげに出入りする

梅雨曇出入せはしき軒雀

相川の町の露地風景

花曇年甲斐もなき物忘れ

どこの寺院だったかなー

あらはなるちくり根洗ひ大夕立

「流れ星」この頃誰かが病気をして心にかかっていた

看る夜の心もとなき星の飛ぶ

50
・
3
・
0

50 50
・
4 4
・
0 0

50
・
0
・
5

50
・
6
・
0

50
・
6
・
0

50
・
7
・
0

50
・
8
・
26

「空蟬」故かんげつ国分寺境内の礎石で遊んだ日をおもいだして
子等去りぬ礎石にならぶ蟬の殻

唐招提寺 観月の夜

大月夜唐招提寺の庭にイフ

「色鳥」山下さん青山さんと越前賤ヶ岳 長浜竹生島の旅

色鳥や朝の湖の小栈橋

「秋惜しむ」小森田さんと笑い乍らの出来たもの

秋惜しむほほ紅少こしさしてみむ

大塚さん「きく」の前に荷をおろす「丹波」のこと

新鮮と我から言ひて冬菜売

相川の座敷の庭に笹子の声がと井上さんからきく

独り居の朝茶の香り笹に来る

「大福茶」我が家は梅毘布茶が毎年のこと大福茶と思っている。

家長の座に心しまりて大福茶

51
・
1
・
0

51
・
1
・
0

50
・
12
・
0

50
・
10
・
0

50
・
10
・
0

50
・
9
・
0

50
・
8
・
0

「野焼き」 あちこちに見る野火に次の命の芽生えを思った。
新らしき命を呼びて野火勢ふ

51・2・0

「春泥」 浄瑠璃寺への終が浮かんできた。そして遠足の列が眼に入る。

春泥の径つき寺の小門あり

51・3・0

黄帽子水筒どの児の靴も春の泥

51・3・0

高山祭をめざして小森田さん 美佐さん 宮川ひでさんと下呂へ行く。折り悪し雨で宵の「曳別れ」はみることができなかったが車窓より禅昌寺の塔を眺めて

花の奥雨に煙れる塔のあり

51・4・0

小森田」さん 高田さんと妙高々原 穂高 と旅して 穂高の有明松尾寺にて、妙高々原にて

老鶯や御手の茶壺のかたむける

51・5・0

老鶯に唐松林行きにゆく

51・5・0

「落し文」 むつかしい兼題にふと昨年の賤ヶ岳を思い出して

湖見ゆる古戦場道落し文

51・7・0

亡妹貞子が死の近くなった頃梨をしきりにほしがった。梨の頃がくると思い出す。

病妹の欲りし日とあり梨供ふ

51・9・0

京都女専クラス会 九州志賀島 大宰府 柳川巡りにて

鐘楼に屋根草のびて露ふかし
四つ手網死魚の乾けり秋の声

51 51
・
10 10
・
17 17

「晩菊」相川の庭の菊 謡の小川先生のこと。
晩菊のうつろいはじむ白きより
晩菊やなほ美しくしき謡の師

51 51
・
11 11
・
0 0

耳の治療で大手町病院に通っていた頃
晩菊やなほ美しくしき謡の師

51
・
11
・
0

天満マーチャンダイズあたりにて
秋冷ゆる赤きストビラ散る舗道

51
・
11
・
0

相川の庭の垣をみて。

綿虫の籬越え来て雨を呼ぶ

51
・
11
・
0

西川さん 増田さん と淡路島健和荘泊り
帰途乗船場にて浅利貝を買う。
灘水仙郷 若人も森など巡る。

蛤の潮のしたたり出船待つ

52
・
3
・
0

東横線多摩川鉄橋通過

河原なる飛球の行方風光る

52
・ 3
・ 0

小田さんの案内で山下さんと三人で吉野山へ

吉野山春蘭の店は客呼ばず

52
・ 4
・ 5

相川の畑にて

花卉ゆれ奥より出でし虻の貌

52
・ 4
・ 0

相川の店二階の軒先に燕巣をつくる

燕の子黄ならびの嘴花のごと

52
・ 5
・ 0

あわくら荘に青山さん 西川さん 増田さん と。自然林のほうへ

木苺や山の佛の唇あせて

52
・ 6
・ 25

整くんが寝冷えしていた時

寝冷え子のうつろの瞳絵本散る

52
・ 7
・ 0

「蜜豆」ふとこんなこともあったかな

蜜豆に唇さみし嘘を言ふ

52
・ 7
・ 0

一家の旅今津 海津大崎 竹生島 つづら荘泊り

八月も終わりに近い つづら荘の前の湖辺にて得た句

湖の色北より深み秋きざす

竹生島真向ふ宿の洗鯉

双
適
入
選
52
・
8
・
0

高野山登山ケーブルカーの窓より芒を眺めて

登るほど尾花は細し高野道

52
・
9
・
0

芒むらの眺めはあちこちに得られた。それに秋吉台の景を重ねて

行けど行けど穂芒波や夕茜

52
・
9
・
0

天高し隠岐の草原牛肥えて

霊場の鐘にも和さずけらつつき

52 52
・ ・
10 9
・ ・
0 0

小田から頂戴した紫しきぶが大きくなって美しい実をたくさんに。

下枝より褪せて小庭の実むらさき

52
・
10
・
0

相川の家で お謡の小川先生御母堂白寿祝い

庭雀床払ひせしふとん干す

白寿祝ぐ願いをこめて羽根蒲団

相川の家元旦の水。若水を汲むにはあらねど。

若水や心新らたに栓開く

52 52
・ ・
12 12
・ ・
0 0

53
・
1
・
0

小田澄子さんの御親類 句友 藤田みや様の訃。

句友の訃夜を沈丁の香のせまり

淡路島への船中よりの景を思い出して

春潮に群れ飛ぶかもめ水尾追ひて

大森先生御他界 城陽大森家を訪ねる

中を開かない門のうちには花ゆらす

門かたく喪の家ひそと花ゆすら

潮騒の丘の花冷学徒眠る

小森田 美佐さんと淡路島行く

城跡の古井戸涸れず苔の花

四国八十八ヶ所札どころ巡拝

桑の実に郷愁ありて札所径

相川蒔田家の告別式だったか

焼香待つ黒幕裾の蟻地獄

53
・
3
・
0

53
・
0
・
0

53
・
4
・
0

53
・
5
・
0

53
・
6
・
5

53
・
6
・
0

53
・
7
・
0

八十八ヶ所霊場巡り（文友会） 最終回さぬき路
杖は本当に持ち帰り

葉鶏頭一筋町の故郷晴れ

結願の杖納め得し鵲日和

相川風景
よく花屋さん狭い路にも立ち入る

花売の残す菊の香路地の朝

郷生の電話だったかなー

口ませし孫の電話や冬すみれ

クラス会佐渡

曼珠沙華島の陵人稀に

一善広島より出張大阪に来て泊る

出張のしげかれ疾かれ牡蠣土産

寄れば逃ぐ子に獅子舞の昂りて

寒餅を切る夜のまど？ 文とろり

旅立ちの鏡に向ふ夏帽子

久々の子に浴衣着せ今宵酌む

$$\begin{array}{ccccc} 53 & 53 & 53 & 53 & 53 \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ 10 & 10 & 10 & 0 & 10 \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{array}$$

53
.
0
.
0

$$\begin{array}{r} 53 \\ \cdot \\ 12 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{r} 53 \\ \cdot \\ 12 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{cc} 53 & 53 \\ \cdot & \cdot \\ 10 & 10 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \end{array}$$

菜の花名を問ひ問はれ三輪の径

53
・
10
・
0

元旦のお祝い

三代が屠蘇なみなみと三つの盃

54
・
1
・
1

年末相川の店より北通りの家へ帰宅の途中走り出た猫に足元狂い捻挫して佐古整形院で治療

冬蒨や繻帯の足歩を試す

54
・
1
・
0

楽しんで相川の家えは沈丁花を挿し木いた。

すくすく成長したかと思うと突然枯れもした。私はその香りがあまり好きでなかった、気になる匂ひだから何とか句材にした。

昂りぬ沈丁の雨音もなく

54
・
3
・
0

啓執や旅誘ひの友便り家族旅行 土柱 阿波池田

54
・
3
・
0

花の下城址碑ひそと休暇村

54
・
4
・
0

さぬき白鳥黒川温泉に糸島さん 増田さんの案内で

山の温泉は音なく春蚊早出でし

54
・
4
・
20

文友会西国三十三ヶ所巡拝 長谷寺にて

草餅に門前町の賑へる

54
・
6
・
0

高田さんに教えられ三年前栗を土に埋めた。何本か芽お出した中の一本がすすくすすくと伸びた。五十七年相川を去る時捨てていくのが惜しかった

実生栗初花咲けり吾も健

54・6・0

冷奴遠き旅より帰り酌む

54・6・0

小森田さんと上田城より別所温泉への旅

落ちるまま実梅の匂ひ城のみち

54・7・16

小森田さんと郡上八幡 井波を訪ねて

城の灯のうるみ郡上の踊更く

54・8・23

新秋や欄間彫る町木の香り

54・8・24

谷底は見えずバス行く山の霧

54・8・24 大島醇子選

高原の駅コスモスの色極め

54・12・0

文友会 西国三十三番 巡礼

結願の梵鐘ひびく峯の秋

54・12・0

相川の家にて

太りゆく大根今日も抜き惜しみ

実むらさき実生をたのむ土かぶせ

青木の実名知らぬ鳥も枝くぐり

新年謡の会

心地よき帯のしまりや謡ひ初め

安藤さん青山さんと淡路島 健和荘で新年を過ごす 渡船のおり

新年の交す汽笛に群れ鳴

村上ぬいさんの急逝

通夜の冷え遺作のばら絵明るきも

出棺す白梅こぼる砂踏み

相川の家

雨戸くる朝なあさなを踏育つ

菜園の菊菜色よし久の子に

浅野繁雄さんご他界 小森田さん入院

青葉して忌ごもる友と病める友

55
・
5
・
0

55 55
・ ・
4 4
・ ・
0 0

55 55
・ ・
3 3
・ ・
0 0

55
・
1
・
1

55
・
1
・
0

54 54 54
・ ・ ・
12 12 12
・ ・ ・
0 0 0

小豆島国民宿舎（池田）に集まりて

明易し潮騒近き島の宿

島の雷止みて翼船ましぐら

竹四郎病む

梅雨嵐し離れ病む子をただ祈る

海南林満喜子さん宅を訪ねて

見送られ見返る薄暮白あやめ

整の昼寝 私のひるね

健やかな孫の寢息やプール焼け

草引きて草の匂ひの手枕寝

あわくら温泉に幡井さんと行く店の決算をすませて

水引の紅ぬれづめに水車

みのり田の道登校のペダル踏む

温泉涼し重き一事を成しとげて

山下さんと退院した小森田さんを名古屋を訪ねて

55	55	55	55	55	55	55
・	・	・	・	・	・	・
9	9	9	8	8	6	6
・	・	・	・	・	・	・
0	0	0	0	0	1	0

退院の友いきいきと派手浴衣

55・0・0

大川一善 安子さんの車で信穂高 木曾濁河温泉

ダム澄める揺れ映りいる合歓の花

55・8・2

露天湯の一灯淡く月見草

双適 55・0・3

霊峰の碧に真向ひ秋ざくら

55・8・4

私の誕生祝として大台ヶ原へ一善安子さんがドライブしてくれた。紅葉が盛りの山々プロ野球日本シリーズ広島優勝のラヂをききつつ

先急ぎつつ仰ぎゆく峯紅葉

55・0・4

しみじみと語らな白菊活けて待つ

55・0・0

相川の住居

遠き旅はなやぎ帰り菊を焚く

55・0・0

枯菊を焚きつつしばし物思ひ

55・0・0

鉄橋を渡れば小駅片時雨

55・0・0

黄の翅の止り色増す実むらさき

55・0・0

天高し施肥よく効きし畑の色

55・0・0

七草粥

七草の数揃はねど畑の葉を

56
・
1
・
0

幡井さんと焼津 学保に庭からの一望焼津港

一望に漁港おさめて梅の丘

56
・
1
・
30

浅野房子さんを訪ねて近くの温泉で一夜を

春炬燵尽きぬ話の果は伏し

56
・
0
・
0

春の冷え別れて一人立つ小駅

56
・
0
・
0

安子さんが井高野の手伝いを止めることについて一善の言い方処置に納得が出来ない
筋の通らないことに妥協出
来ない私の性

争ひてふと空しかり梅の闇

56
・
0
・
0

飯田知子短大入学祝い

合格の祝袋は字も太く

56
・
3
・
0

相川家

摘みし露独りの厨たのしかり

56
・
4
・
0

散る桜庭の胸像ただ黙し

56
・
4
・
0

武具飾る子は父となり遠くあり

真鍋先生の鮎のこと 市原さんのご主人の釣りのこと

解禁の夕べたまはる吉野鮎

釣りし鮎川に戻して春の風

上京車中

富士聳ゆ裾野の町の鯉のぼり

養老の滝へ

滝水をコップに汲みて喉しまる

相川地藏まつり

御詠歌の流れへいそぐ地藏盆

児玉正志さん急の来客

枝豆に酌みて不意なる遠き客

市原さんご夫妻の釣り

釣る夫の片辺に妻の秋日傘

56
・
4
・
0

56 56
・ ・
5 5
・ ・
0 0

56
・
0
・
0

56
・
7
・
0

56
・
8
・
0

56
・
9
・
0

56
・
10
・
0

$$\begin{array}{cccccccc} \begin{array}{cc} 56 & 56 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \end{array} & \begin{array}{ccc} 56 & 56 & 56 \\ \cdot & \cdot & \cdot \\ 0 & 0 & 0 \\ \cdot & \cdot & \cdot \\ 0 & 0 & 0 \end{array} & \begin{array}{c} 56 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array} & \begin{array}{c} 56 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array} & \begin{array}{c} 56 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array} & \begin{array}{cc} 56 & 56 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \end{array} \end{array}$$

踏み惜しみつつ鎌倉の銀杏黄葉

師走の姿

ウインドに背まるく映る師走町

直紀 年末相川にきて手伝つてくれる

晦日そば孫の食べざま頼もしく

上京 成城の家

窓の梅ほころびゆくをみるしじま

散り梅のかかり濯ぎのもの乾く

八百様を訪ねて

春遠しこもれる叔母に京の菓子

海南的林さん受験（阪大）で泊まる

受験生泊めて祈りを同心に

相川の橋より

日脚伸ぶ中洲に群れる鳥の白

露の臺焼きその香の朝厨

56
・
0
・
0

56
・
0
・
0

56
・
0
・
0

57 57
・ ・
0 0
・ ・
0 0

57
・
0
・
0

57
・
0
・
0

57 57
・ ・
0 0
・ ・
0 0

仲塚の案内 垂水神社

散る花の流れゆくあり踏まるあり

57
・
0
・
0

郷生と小田原城

天主より振る手呼ぶ声花の中

57
・
0
・
0

相川の畑の垣越し中島さんのお嬢さん

葱坊主垣越しの子はよくしゃべる

57
・
0
・
0

耳遠く笑顔で応ふ木の芽雨

57
・
0
・
0

一善 安子さんと早発して青山高原にドライブそれは伊賀上野方面への再ドライブだったその数日前 室生寺に之も早朝出かけてたぐさんの写真を撮ったつもりが、カメラはフィルムが入っていなかった。 わざわざ伊賀上野 百合子宅まで訪れたのに 室生寺門前で草餅を買う 時間はまだまだ昼前 大野寺で昼弁当をいただき相談は急に伊賀上野へ

草餅にふと道変へて娘に急ぐ

57
・
0
・
0

小汐さん 増田さん 伊藤さん あわくら荘より鳥取砂丘 磨? 寺へ

直ぐ消ゆる足跡砂に五月旅

57
・
0
・
0

風光る砂丘を踏めば若返る

57
・
0
・
0

石段のあえぎに著莪の花やさし

57
・
0
・
0

岐阜羽島へ行ったとき

単線の停車は長し青田風

思い出湖岸の旅

花栗の香に堂守の鍵開く

老鶯や堂守力こめて説く

北海道旅行

知床の大雪溪に昼の月

雪溪を映し知床五湖寂と

えぞかんぞう岬はるかには異国なる

昆布乾すさいはての島明易し

獅子独活の花眼の限り・

成城の家 笹倉の庭に鶯草が

鶯草の鶯二羽となる娘に甘え

相川の最後の夏

魂迎ふ一人となりて古家守る

57
・
0
・
0

57
・
0
・
0

57
・
0
・
0

57
・
0
・
0

57
・
0
・
0

57
・
0
・
0

57
・
0
・
0

57
・
0
・
0

57
・
0
・
0

57
・
0
・
0

平成8年と9年の原本は見当たらない。

句は残っていたので

三をみてください。

第2章 all

- 野仏の笑ひ在せり曼珠沙華 19730900
 日を浴びてままごとの子や草紅葉 19731000
 顔見世の名残を夢に見しも去年 19731200
 髪結ひて寝ず娘は待つ初詣 19740100
 猫の恋根笹の乱れ昨日今日 19740200
 山の色幾重の果の雪解光 19740200
 陵の薄陽の濠も水草生ふ 19740300
 娘の縁談又もこわれぬ春の雪 19740300
 花過ぎぬいづこともなき旅心 19740400
 山裾の雨に煙れる桐の花 19740500
 夜神東の明りに映ゆる銀杏黄葉 19741100
 野仏の顔かくすまで草の花 19740900
 置炬燵向ふ人なきあで蒲団 19741100
 年用意丹波男の荷は売れ早き 19741200
- 友待つに暮色刻々粉雪舞ふ 19750100
 風ぬくき末黒野鳥群をなし 19750200
 化粧水掌に冷えのなし春隣 19750300
 綿菓子も売れて野崎の花曇 19750400
 花曇年甲斐もなき物忘れ 19750400
 若やぎて夏来る歌口ずさむ 19750500
 梅雨曇出入せはしき軒雀 19750600
 花葵露地の家々箱咲きに 19750600
 あらはなるちくり根洗ひ大夕立 19750700
 看る夜の心もとなき星の飛ぶ 19750826
 子等去りぬ礎石にならぶ蟬の殻 19750800
 大月夜唐招提寺の庭にゝつ 197508
 色鳥や朝の湖の小棧橋 19751000
 秋惜しむほほ紅少こしやしてみむ 19751000

- 新鮮と我から言ひて冬菜売 19751200
 独り居の朝茶の香り笹に来る 19760100
 家長の座に心しまりて大福茶 19760100
 新らしき命を呼びて野火勢ふ 19760200
 春泥の径つき寺の小門あり 19760300
 黄帽子水筒どの児の靴も春の泥 19760300
 花の奥雨に煙れる塔のあり 19760400
 老鶯や御手の茶壺のかたむける 19760517
 老鶯に唐松林行きにゆく 19760516
 湖見ゆる古戦場道落し文 19760700
 病妹の欲りし日とあり梨供ふ 19760900
 鐘楼に屋根草のびて露ふかし 19761017
 四つ手網死魚の乾けり秋の声 19761017
 晩菊のうつろいはじむ白きより 19761100
 晩菊やなほ美しくしき謡の師 19761100
 秋冷ゆる赤きストビラ散る舗道 19761100
 綿虫の籬越え来て雨を呼ぶ 19761100
 蛤の潮のしたたり出船待つ 19770305
 河原なる飛球の行方風光る 19770300
 吉野山春蘭の店は客呼ばず 19770405
 花卉ゆれ奥より出でし虻の貌 19770400
- 燕の子黄ならびの嘴花のいと 19770500
 木苺や山の佛の唇あせて 19770625
 寝冷え子のうつろの瞳絵本散る 19770700
 蜜豆に唇さみし嘘を言ふ 19770700
 湖の色北より深み秋きやす 19770800
 竹生島真向ふ宿の洗鯉 19770800
 登るほど尾花は細し高野道 19770900
 行けど行けど穂芒波や夕茜 19770900
 天高し隠岐の草原牛肥えて 19770900
 霊場の鐘にも和さずけらつて 19771000
 下枝より褪せて小庭の実むらさき 19771000
 庭雀床払ひせしふとん干す 19771200
 白寿祝ぐ願いをこめて羽根蒲団 19771200
 若水や心新らたに栓開く 19780100
 句友の訃夜を沈丁の香のせまり 19780300
 春潮に群れ飛ぶかもめ水尾追ひて 19780300
 門かたく喪の家ひそと花ゆすら 19780400
 潮騒の丘の花冷学徒眠る 19780300
 城跡の古井戸涸れず苔の花 19780605
 桑の実に郷愁ありて札所径 19780600
 焼香待つ黒幕裾の蟻地獄 19780700

- 葉鶏頭一筋町の故郷晴れ 19781000
 結願の杖納め得し鴟日 19781000
 花売の残す菊の香路地の朝 19781200
 口ませし孫の電話や冬すみれ 19781200
 曼珠沙華島の陵人稀に 19780900
 出張のしげかれ疾かれ牡蠣土産 19781000
 寄れば逃ぐ子に獅子舞の昂りて 19781000
 寒餅を切る夜のまど とうり 19781000
 旅立ちの鏡に向ふ夏帽子 19781000
 久々の子に浴衣着せ今宵酌む 19781000
 草の花名を問ひ問はれ三輪の径 19781000
 三代が屠蘇なみなみと三つの盃 19790100
 冬蒔や繙帯の足歩を試す 19790100
 昂りぬ沈丁の雨音もなく 19790300
 啓執や旅誘ひの友便り 19790300
 花の下城址碑ひそと休暇村 19790420
 山の温泉は音なく春蚊早出で 19790420
 草餅に門前町の賑へる 19790600
 実生栗初花咲けり吾も健 19790600
 冷奴遠き旅より帰り酌む 19790600
 落ちるまま実梅の匂ひ城のみち 19790716
- 城の灯のうるみ郡上の踊更く 19790823
 新秋や欄間彫る町木の香り 19790824
 谷底は見えずバス行く山の霧 19790824
 高原の駅コスモスの色極め 19790824
 結願の梵鐘ひびく峯の秋 19791200
 太りゆく大根今日も抜き惜しみ 19791200
 実むらさき実生をたのむ土かぶせ 19791200
 青木の実名知らぬ鳥も枝くぐり 19791200
 心地よき帯のしまりや謡ひ初め 19800100
 新年の交す汽笛に群れ鳴 19800101
 通夜の冷え遺作のばら絵明るきも 19800000
 出棺す白梅こぼる砂踏み 19800000
 雨戸くる朝なあさなを踏育つ 19800400
 菜園の菊菜色よし久の子に 19800400
 青葉して忌ごもる友と病める友 19800500
 明易し潮騒近き島の宿 19800531
 島の雷止みて翼船ましぐら 19800601
 梅雨嵐し離れ病む子をただ祈る 19800600
 見送られ見返る薄暮白あやめ 19800600
 健やかな孫の寝息やプール焼け 19800800
 草引きて草の匂ひの手枕寝 19800800

- 水引の紅ぬれづめに水車 19800900
 みのり田の道登校のベダル踏む 19800900
 温泉涼し重き一事を成しとげて 19800900
 退院の友いきいきと派手浴衣 19800717
 ダム澄める揺れ映りいる合歓の花 19800802
 露天湯の一灯淡く月見草 19800803
 霊峰の碧に真向ひ秋ざくら 19800804
 先急ぎつつ仰ぎゆく峯紅葉 19801102
 しみじみと語らな白菊活けて待つ 19801102
 遠き旅はなやぎ帰り菊を焚く 19801102
 枯菊を焚きつつしばし物思ひ 19801102
 鉄橋を渡れば小駅片時雨 19801200
 黄の翅の止り色増す実むらさき 19801100
 天高し施肥よく効きし畑の色 19801100
 七草の数揃はねど畑の菜を 19810100
 一望に漁港おさめて梅の丘 19810130
 春炬燵尽きぬ話の果は伏し 19810300
 春の冷え別れて一人立つ小駅 19810399
 争ひてふと空しかり梅の闇 19810300
 合格の祝袋は字も太く 19810300
 摘みし露独りの厨たのしかり 19810400
- 散る桜庭の胸像ただ黙し 19810400
 武具飾る子は父となり遠くあり 19810500
 解禁の夕べたまはる吉野鮎 19810500
 釣りし鮎川に戻して春の風 19810400
 富士聳ゆ裾野の町の鯉のぼり 19810500
 滝水をコップに汲みて喉しまる 19810700
 御詠歌の流れへいそぐ地藏盆 19810800
 枝豆に酌みて不意なる遠き客 19810900
 釣る夫の片辺に妻の秋日傘 19811000
 武家屋敷崩れ土堀に石露盛り 19811022
 草子里時雨れる朝の大き虹 19811024
 わだかまり解けて減りゆく盛みかん 19811000
 噂消え火事場に茂る泡立草 19811100
 売地札草にかくれて秋暮るる 19811100
 栗おこわ我が誕生は頃もよく 19811100
 霜よけにレタス生々玉巻ける 19811100
 供華の菊剪りためらひぬ眠り蝶 19811100
 落葉炊く煙の中に思ふこと 19811100
 新らしく菊きり供え旅に出る 19811100
 踏み惜しみつつ鎌倉の銀杏黄葉 19811124
 ウィンドに背まるく映る師走町 19811200

- 晦日そば孫の食べさま頼もしく 19811200
 窓の梅ほころびゆくをみるしじま 19820200
 散り梅のかかり濯ぎのもの乾く 19820200
 春遠しこもれる叔母に京の菓子 19820200
 受験生泊めて祈りを同心に 19820300
 日脚伸ぶ中洲に群れる鳥の白 19820300
 落の臺焼みその香の朝厨 19820300
 散る花の流れゆくあり踏まるあり 19820407
 天主より振る手呼ぶ声花の中 19820400
 葱坊主垣越しの子はよくしゃべる 19820500
 耳遠く笑顔で応ふ木の芽雨 19820500
 草餅にふと道変へて娘に急ぐ 19820500
 直ぐ消ゆる足跡砂に五月旅 19820511
 風光る砂丘を踏めば若返る 19820511
 石段のあえぎに著莪の花やさし 19820512
 単線の停車は長し青田風 19820600
 花栗の香に堂守の鍵開く 19820700
 老鷲や堂守力こめて説く 19820629
 知床の大雪溪に昼の月 19820629
 雪溪を映し知床五湖寂と 19820629
 えぞかんぞう岬はるかは異国なる 19820629
- 昆布乾すさいはての島明易し 19820629
 獅子独活の花眼の限り能取岬 19820706
 鷺草の鷺二羽となる娘に甘え 19820706
 魂迎ふ一人となりて古家守る 19820800
 手ごなしで土をかぶせる秋の種 19820629
 豪雷にいさかふ妹弟抱き合ふ 19820629
 亡娘ノート紙魚生きている悲しさよ 19820629
 秋立ちぬ束ねてさせり亡母の櫛 19820629
 晚菊の咲くや明日より他人の庭 19821000
 引き越しの荷隅にかばふ冬すみれ 19821000
 秋そゞろ引越荷物嵩む部屋 19821000
 秋風も他人もやさし移り住み 19821100
 見捨てかね新居に挿せり倒れ菊 19821100
 寛ぎて見る山荘の紅葉濃し 19821100
 乗りおくれくやしき顔に冬の月 19821100
 寒椿にぶる起ち居のすべもなぐ 19821200
 友呼ばむ一人に余る日向ぼこ 19821200
 転宅の迫りし庭の実むらさき 19821000
 移り住む名残の菊香衰えず 19821000
 玉砂利に歩の乱れなし神の留守 19821000
 大役の初旅富士が雲間より 19830103

- 梅日和白壁光る村一望 19830200
 しつけとる春立つ朝の装ひに 19830300
 水ぬるむ就職決り紅さす娘 19830300
 桜餅娘の訪ひくれし小半日 19830300
 目口なき紙の雛や掌になじむ 19830300
 裏の家の雨に堪へ咲く八重桜 19830400
 友の情雨に摘みきしわらび飯 19830400
 忌に集るしのぶ日がなを花の雨 19830400
 楠公通の大楠学校庭に移し植え 19830400
 除り去らる囀り包む街の樹が 19830400
 読むも憂し眺むも憂しや花の雨 19830400
 集ればお国訛よもぎ餅 19830400
 秩父路につづく芽桑の夕映えて 19830407
 万緑や一言神に願一つ 19830521
 田植機の若者帽子に赤い花 19830521
 桜桃たわわの国へ喜寿の旅 19830611
 杖たよる友出迎へに梅雨はげし 19830700
 朝涼し咲きつぐ花を供華日記 19830700
 引き越して来たる浜木綿咲き安堵 19830700
 娘三人訪ひくれ風鈴よく鳴れり 19830700
 一族の年長となり魂まつる 19830800
 動かぬ灯動く灯一望盆の果 19830800
 洗ひ髪立つペランダの風は秋 19830800
 蕎麦三日食べてさわやか信濃旅 19830904
 色鳥や岳に真向ふ湖の宿 19830900
 大き鳥湖上を舞ひて夏去れり 19830900
 庭紅葉もえて謡に力声 19831100
 謡ひ果て山莊黄葉をのこし暮る 19831100
 翅やすむ蝶もむらさき式部の実 19831100
 独り居のよき日淋し日菊挿して 19831100
 疎く住み安けき日々や杜鵑草 19831100
 屑金魚育ち掬ひし児も少年 19831100
 案内三日京の紅葉に酔ひ疲る 19831100
 照紅葉京一望の峯の寺 19831100
 山莊の集ひに菜飯冬ぬくし 19831207
 冬入日竹叢透し荘なごむ 19831207
 一とせを会ひ得ぬ人の賀状増し 19840100
 しきたりをつづけて独り屠蘇機嫌 19840100
 トンネルを抜ける度雪深くなり 19840102
 ただいまと灯せば応ふ室の花 19840200
 ちゃん呼びで遠き日戻る木の葉髪 19840200
 春寒やぱったり出会ひ出ぬ名前 19840200

- 争ひも夢よ首塚土筆の芽 19840300
 老夫婦夜をぼつぼつとひなあられ 19840303
 雪解風由布岳さして大鴉 19840305
 土を割る花芽それぞれ色ありて 19840300
 によきによきと花芽ラッシュの庭の土 19840300
 花苺児にしやがみ見す苺の粒 19840400
 朝毎の独りに足りる庭苺 19840500
 団地住みテレビの上の兜の威 19840500
 ホース先そらせばそこも青蛙 19840700
 花南天隣初嬰の襁褓干す 19840700
 待ちつつも一人を涼しと思ふ日も 19840800
 庭茂り払ふ枝にもある生命 19840800
 孫の名をとりちがえ呼ぶ盆家族 19840800
 夏萩に誰みくじ結ふ禁よそに 19840800
 忌ごもりの友訪ひて汨つ戻り梅雨 19840700
 夏書終へ東塔西塔仰ぐ朝 19840600
 空と無の多き夏書や朝鴉 19840600
 りんどうや標高識のたつ小駅 19840900
 高原列車おそしとゆれる花すすき 19840900
 紫の小波たてり松虫草 19840900
 思はざる遠富士すゝきの小窓より 19840900
 朝風に彩をひろげてのうぜん花 19840700
 風涼し天主の床の黒光り 19840700
 俳聖殿忍者屋敷も蟬しぐれ 19840900
 秋涼し絵とき説法に笑ひあり 19840917
 水軍の洞の跡や秋の潮 19840917
 青い眼の手ぶりに見入る踊の輪 19840800
 諷刺歌踊りの櫓は高調し 19840800
 送り火やもとの一人に戻る夜 19840800
 帰省子の言葉大人ひふと淋し 19840800
 若者となるは別れか鳥雲に 19840800
 夏霧の湧きて流れて山の湖 19840700
 山茶花の垣咲き始めぬ謡声 19841100
 冬の雲まこと知らせぬ人見舞ふ 19840000
 年忘れ流す憂さなきワインの香 19841200
 賀状書く亡母の字に似る母の年令 19841200
 寄せ鍋の沸々はずむ故郷ことば 19841200
 するつと食ぶ熟柿に郷愁そぞろ湧く 19841200
 吾が誕生秋刀魚で祝ひ心足る 19841100
 初富士や大東京の隅に住み 19850100
 林立の煙突富士に初煙 19850100
 初仕事裾野の町の白煙 19850100

- 移し植え三年の梅に初つばみ 19850200
 陽を集め日毎ふくらむ木瓜の花 19850200
 蘭匂ふ独りの部屋に惜しき程 19850300
 逆縁の香たく背なに春空し 19850200
 春や憂し着かえし裾の静電気 19850400
 割れ込まれ句心とぎれぬ春炬燵 19850300
 初蔵（わらび）雨に持ちくれ留守の扉に 19850400
 名にひかれ植え初花をひめ辛夷 19850400
 天主より眺むる花の城下町 19850421
 階高し一打の鐘に花の散る 19850421
 老鶯に耳あそばせて喜寿の足 19850509
 蝸牛わがもの顔に城跡の碑 19850509
 ぶちぶちと峠に摘めり夏わらび 19850618
 木苺の酢っぱ甘さや溪流に 19850617
 塗るかへて狭庭の客に青蛙 19850600
 花ざくろ觸れて硬しや朱の色 19850600
 御名のごと清らに生きて蓮花 19850600
 たまはりし紫式部さわ咲けど 19850800
 短夜や句机ならぶ夢の切れ 19850800
 夜濯ぎて一日終りぬ恙なく 19850800
 働けることの幸玉の汗 19850800
- 言ふだけで気のすむ愚痴に団扇風 19850800
 階暑し団地こつこつセールスマン 19850900
 梅雨しめる記帳簿將軍旧居訪ひ 19850625
 苔の花將軍愛馬の小さき塚 19850625
 將軍旧居もちの花 19850625
 意を通し過ぎし淋しさ夏の蝶 19850625
 小駅の時計おそしと思ふ時雨来て 19851119
 名もゆかしこほろぎ橋の溪紅葉 19851120
 冬の雷一発のみや能登に泊つ 19851120
 冬ぬくし見舞ひし友にもてなされ 19851200
 謡声白山茶花の垣流れ 19851200
 小説の終りのごとく落葉散る 19851200
 愛語りし腰掛石や昼ちちろ 19850000
 曼茶羅に政子のむかし秋そぞろ 19850000
 露けて墨のうすれしいわれ書 19850000
 輪飾りの小さきをかけ団地の扉 19860100
 寒木瓜の紅を深めて雨上る 19860100
 盆梅や鉢の木謡ひたき夜なり 19860100
 成人の日の背広着し子を見上ぐ 19860200
 試験子の窓に憂きほど春深雪 19860300
 弔ひて無口の帰り春吹雪 19860200

- ことなげに抜歯をされて春寒し 19860300
 白梅や三百年を語る幹 19860300
 ゆずり合ひつゝ空うばひ梅盛る 19860300
 春時雨急げば合はす鍵の鈴 19860300
 土を割る花芽それぞれ色ありて 19860300
 書き終えてほつと紅茶の浅き春 19860300
 庭隅に鈴蘭匂ひ旅ごころ 19860400
 屋根草もうすき緑に御寺春 19860400
 枝うつるりす生き生きと新樹光 19860400
 散るものは散らして扇塚の春 19860400
 明日に咲く牡丹見よと泊めくれし 19860500
 牡丹の今開かむと息づかひ 19860500
 身も心青く染まりぬ宮若葉 19860500
 山越ゆるあの辺野崎か花曇 19860400
 バスの窓遠見を塞ぐ栗の花 19860613
 蛇の衣板一枚の城跡文 19860614
 アイスクリーム売の熱弁落城譜 19860614
 蔦青し城見ゆ坂のオランダ塀 19860615
 青葉冷え天主の跡の落城譜 19860615
 踊太鼓すぐそこにきき足を病む 19860800
 山男めきひげ面の帰省孫 19860800
- 癒ゆること信じてきけり蟬の声 19860800
 癒ゆきざししかと涼しき今朝の風 19860900
 亡母の櫛ふとさしてみる盆支度 19860800
 杖に頼る試歩の足もと萩こぼる 19860900
 寝団扇にうちわどころの故郷のこゝへ 19860900
 去ぬ燕便りとたよりすれちがひ 19860900
 鰯雲交しておかむ生き形見 19861000
 風に雲に秋の深みを知る夕べ 19861000
 カタカナ語事典にいどむ老夜長 19861000
 菊の香や来し方遠し五十年忌 19860900
 雲を割り冬陽美し退職す 19861100
 むなしさも煙としたり菊を焚く 19861100
 年用意心のこもる故郷の荷 19861200
 満目の紅葉それぞれちがふ色 19861115
 静かなりいで湯娘と在り去年今年 19870101
 たまさかの晴着に帯と初芝居 19870100
 シテ謡ひ修めし安堵室の梅 19870100
 誰が為と笑はれもして初鏡 19870100
 梅白し陽ざしの居間の笑ひ声 19870200
 男子校女子校つづき芽ふく道 19870200
 庭の陽を占めて寒木瓜紅の濃し 19870200

- 火廻要懐祀符の墨字に春ぼこり 19870300
 今日は憂し今日は美しくし木の芽雨 19870300
 春愁を恥じて陶狸の腹を撫す 19870300
 名桜につきぬ名残の里を去る 19870419
 山裾の梨の花園に白昼夢 19870415
 花クローバ終の棲家の地鎮祭 19870500
 松の花傘寿を集ふ公の庭 19870513
 文学館出でてまぶしき若葉光 19870513
 目礼がことばよ通院路の茂り 19870600
 青葉雨千人塚の匂ひ濃し 19870527
 土産店菖蒲と競ふ肥後名所 19870428
 五月晴阿蘇の寝釈迦に帰途祈り 19870529
 夏草に五百羅漢のかくれんぼ 19870709
 夏草にあそびつ羅漢の泣き笑ひ 19870709
 自転車で五日の旅の戻り梅雨 19870700
 初咲きの桔梗と供華に朝づとめ 19870800
 夜濯ぎの干場思はず下手な歌 19870800
 八階に住みて音なき遠花火 19870800
 早発ちてさかさ富士みむ秋の湖 19870915
 霧晴れて小波が消すさかさ富士 19870915
 文学碑たてる峠に秋の富士 19870915
- 花すゝき駅近かそうで遠かりし 19870904
 招くごとコスモス揺るる無人駅 19870904
 誰も来ずくつろぐ時の菊日和 19871100
 老夜長旅に集めし箸袋 19871100
 とっておきのワインもてなす良夜かな 19871000
 南洲を語る白髪月の部屋 19871000
 紅葉濃し峠二つを越えし温泉 19871119
 隣より争ひ声や秋の暮 19871100
 石路さかり先は稲荷の鳥居径 19871100
 海知らぬ犬を毎朝冬の浜 19871200
 新らしき木の香の中に賀状書く 19871200
 看とりつつ句帳かた辺に長き夜 19871000
 看とり女にある秋晴や特選句 19871000
 祭太鼓看とりの窓に遠くきく 19871000
 安眠なき看とりの夜々に虫親し 19871000
 愛語りし腰掛石や昼ちちろ 19871000
 露けしや墨のうすれしいわれ書 19871000
 曼茶羅に政子の昔秋そぞろ 19871000
 寒青空娘は頬染めて婚約を 19880100
 梅二月婚約成りし娘のまぶし 19880200
 婚近き娘と春いちご分ちあい 19880300

- 列車徐行深雪のここに友住ふ 19880200
 たまわりし手造り味噌に露のとう 19880200
 枯芝にねてにらまるゝはらみ猫 19880200
 春寒や三日もつづく探しもの 19880200
 春灯失せものこゝに出て笑ふ 19880200
 椿落つ今日も名知らぬ鳥の来て 19880300
 ゆかし名ばかり揃えて盆梅展 19880200
 春潮に水尾ひく連絡船（ふね）のあと幾日 19880300
 終航の間近かき名残瀬戸の春 19880300
 花菜漬土産に訪ひくれ京言葉 19880300
 手染めとて淡き春着の京言葉 19880300
 花冷えて鬼女の棲みける巨き岩 19880423
 恐ろしき昔語りや花の里 19880423
 杉古りて黒塚ひそと花曇る 19880423
 若やぎて傘寿の集ひ牡丹園 19880516
 声低く僧が餅売る牡丹寺 19880516
 手をとりにて笑む道祖神若葉光 19880516
 花の雨眠る山湖を去りがたく 19880517
 老鶯や奥へとたずね政子墓所 19880601
 旧姓で呼びあふ莊の明易し鎌倉莊） 19880601
 まぐなぎを払ひ百体地藏訪ふ 19880600
- 探ねゆく流れ涼しき溪いで湯（太閤の湯） 19880700
 カンナ燃えひしめきあえる養鶏舎 19880700
 雲走り峯にこま草這ひて咲く 19880700
 浜木綿にしばらくのこる夕茜 19880700
 故里の植田にうつす己が影 19880800
 錦飾る故郷ならずも茄子の花 19880800
 甚平着て今日も碁敵待つ 19880800
 叔父跡地ひまわり咲かす家五軒 19880800
 朝顔や一家は北に赴任して 19880800
 秋蝶が惜しむ別れの前よぎる 19880900
 見送りの垣根アベリア咲きこぼる 19880900
 滝二つ遠見の台に小手かざし 19880900
 穂すすきのみるみる刈られゆく売地 19880900
 吾が暮し覗いて聞いて青芒 19880900
 秋と思ふホームに目立つ黒い靴 19880900
 爽かや事終へて発つ旅の朝 19880900
 大秋晴善光寺平一望に 19880900
 歌声をのせて寄せ来る芒波 19880900
 コスモスのゆれる川沿ひ遊歩道 19880900
 母となる娘に寄す思ひ冬ぬくし 19881100
 実南天紅し娘は母となる 19881100

- 晩菊や終止符打たん独り住み 19881100
 息子と同居決めむ独りの湯豆腐鍋 19881100
 トネルを出て越前の雪景色 19881200
 仏壇を買ひに越路へ雪清し 19881200
 山ふところに香煙みちて初薬師 19890102
 初護摩の煙いただき肩かるし 19890102
 紅梅のふふみしことも友へ書く 19890000
 大茶盛廻す茶碗に和気あふれ 19890100
 寒木瓜の紅流れそう雨つづく 19890200
 春寒し故なく心のとがる今日 19890200
 契約のとれてマフラー忘れ去ぬ 19890200
 雪ごもり写経の日々と紙便り 19890200
 春風や繰り上げ帰国のよき知らせ 19890200
 引き越しの迫り咲きつぐ春の彩 19890300
 転宅の別れの集ひ鱗すし 19890300
 すましたる貴婦人めける柴木蓮 19890400
 昼顔や島にたづねる古き墓 19890430
 夕明りのこる卯波や島に泊つ 19890430
 城下町一望にほふ栗の花 19890425
 お天主へ石垣高し松の花 19890425
 天主閣仰ぐ茶店の藤こぼる 19890425
- 紫陽花の彩拵げゆく遊歩道 19890500
 夏三つ葉雨の小やみに摘む留守居 19890600
 母も娘もショートカットにさくらんば 19890600
 窓開き大向日葵に見つめらる 19890700
 驕りても向日葵は好き美しくしき 19890700
 留守居して一人に惜しき風涼し 19890700
 水撒きて陶狸うれしき顔となる 19890700
 思ひきり水撒き散らす重きもの 19890700
 賞め言葉裏に返さず花クローバ 19890700
 水撒きて木々と話をする留守居 19890800
 白粉花空家となりし垣に満つ 19890800
 病葉のこの量踏みて医に通ふ 19890800
 鳶舞ふ高野の夏の深き空 19890700
 野猿乗り夏の河原の若者等 19890700
 グラデオラス店の娘明るく迎へくれ 19890700
 ポンポンダリヤ活けて村営コーヒ―館 19890700
 漁火に想ひそれぞれ宿浴衣 19890800
 盆列車着席までを送らるる 19890800
 伝説の湖ははるかに芒原 19890900
 湖も山もみるみる消えて霧の海 19890900
 山の霧流れて速し湖生る 19890900

- のぼり来て賽の河原の細芒 19890900
 旅に訪ふドラマ舞台の町も秋 19890900
 久の出会い杖目じるしと言ふも秋 19890900
 秋釣の成果に夕餉賑へり 19891000
 秋雨のやまず留守居の夕仕度 19891000
 コスモスの身丈を埋めてはるか富士 19891000
 湧き水の秋澄む池に富士の影 19891000
 天高し誕生釈迦の細き指 19891029
 落葉かき風に根気の作務の僧 19891029
 柿届く家なき故郷の友も老ひ 19891100
 郷言葉の電話果なし老夜長 19891100
 命延ぶ泉いただき峯を越す 19891106
 野仏の膝にさい銭紅葉散る 19891106
 冬濤の音きゝ紀伊の朝茶粥 19891200
 娘が立てし枕屏風に安眠して 19891200
 晩菊に名残水やり旅に出る 19891200
 報恩講善女となりてしる粉賜ぶ 19891209
 花車たがへず来たり年用意 19891200
 心ゆくまで謡ひけり年忘れ 19891200
 娘の忌日となりて年経る小つもいり 19891200
 旅立ちを止めて眺むる強吹雪 19900100
- おくれ咲く紅山茶花の雪化粧 19900100
 潮の香をはこび来る風春近し 19900200
 水温みあひる天国てふ川辺 19900200
 指圧効きかろき足もと露のとう 19900200
 桃ふふみ声出し笑ふと嬰便り 19900300
 初雛に招かれ曾孫しかと抱く 19900300
 亡母の忌や弟としのぶ春炬燵 19900300
 高々と辛夷咲きみつ城跡園 19900300
 もてなさる小さき土鍋に土筆煮て 19900300
 こんがりと焼味噌露のとうほのと 19900300
 露摘みて老の自慢のちらしずし 19900400
 一心の白夕闇にほのと浮く 19900400
 陶狸の背出で入る鳥の巣づくりか 19900400
 葉桜や友のギブスはまだ除れず 19900400
 露座観音見おろす里の柿若葉 19900500
 柿若葉光る白壁つづく里 19900500
 風薫る河童出そうな筑後川 19900500
 老鶯に迎えられけり峡の宿 19900500
 鱧一尾釣りて得意の帰宅ベル 19900600
 釣りし鱧ほめて一箸づつ廻し 19900600
 ご協力和酔い甘夏を嫁出し来 19900600

- 紫陽花や登山電車は幾曲がり 19900600
 お世辞とも思ひつつ買ふ夏帽子 19900700
 夏帽子鏡の顔はややすまし 19900700
 のびて寝る猫のかたへに端居して 19900700
 待つ荷物おそし木樺はしほみ初む 19900700
 鎌倉の御寺涼やか友葬る 19900700
 母として慕はれ甥とビールくむ 19900800
 風鈴や父母知らぬ甥よき父に 19900800
 五十年忌修すあの日も秋暑く 19900800
 巨寺にみちのくらしき萩まつり 19900900
 雨上がり紅たわゝなるりんご園 19900900
 子に孫にりんご送りて津軽旅 19900900
 台風もよしといで湯にやり過ぐし 19900900
 久に來し皇居のお濠曼珠沙華 19901000
 コスモスの風に流せるほどの些事 19901000
 ただ声をききたく夜長の遠電話 19901000
 バスを待つこわれベンチに秋の蝶 19901000
 茫々の芒の中や美人塚 19901110
 神在月とガイド熱あり出雲路よ 19901110
 濃紅葉座禪堂の扉はかたく閉じ 19901119
 寄進瓦に筆持つひまも紅葉散る 19901119
- 庭小春鳩来て犬が少し吠え 19901200
 晩菊や顔見ぬ電話言ひ過ぎし 19901200
 枯木してはるか富士見る道となる 19901200
 数の子の歯音うれしや八十路三つ 19910101
 初詣極楽寺てふ名にひかれ 19910102
 初旅や全き富士に真向へり 19910100
 立春の陽に勇氣湧きトレーニング 19910200
 足鍛え眠り覚めたる山のぼる 19910200
 人波に流されてみる梅まつり 19910200
 指呼の山みるみるかくす春吹雪 19910219
 舞へ狂へいで湯ごもりの春吹雪 19910219
 ほの酔ひや孫つぎくれしお白酒 19910300
 ひなの前老も交りて撮る今宵 19910300
 梅林へ少しの坂も手を引かれ 19910310
 白梅の古木に希ふ吾が余生 19910310
 湖見ゆる観音堂の大桜 19910400
 芽柳の日々に大ゆれ風青し 19910400
 花散るや石州瓦の光る村 19910400
 初蝶や癒えて佇つ庭彩ふえて 19910400
 初蝶やふつつり切れし思ひつゝ 19910400
 新茶賜ふ少年今は病院長 19910500

- 芍薬や三度の転居共にして 19910500
 染め止めて白髪軽し青葉風 19910600
 年令らしく白髪でおしゃれ夏帽子 19910600
 釣り土産べらとはうれし瀬戸育ち 19910600
 早苗田の日毎濃くなる療の窓 19910600
 山の湖万緑の中遠くあり 19910600
 山間の夏霧深き駅に着く 19910700
 立葵彩を揃えて山の駅 19910700
 薬草湯の香りのこりて宿浴衣 19910700
 大寸の宿衣たぐりて岩魚膳 19910700
 億の土地我がもの顔に青すすき 19910800
 通院の道は川沿ひ月見草 19910800
 時計おそし独り留守居の小粒ぶどう 19910800
 秋暑しビルの掃除夫見上ぐ窓 19910800
 保養所のヴェランダ踊りの列を見る 19910800
 踊りうちわよべの土産と保養友 19910800
 秋の湖哀話流して遊覧船 19910900
 温泉の町にお湯かけ地蔵秋うらら 19910900
 敬老日ほの酔はされて若返る 19910900
 誰が家ぞ芒刈られて地鎮祭 19910900
 秋場所の終り落ちつき夕支度 19910900
- ゆかしさに秋七草の寺巡り 19910900
 尊氏も正成も美男菊衣 19911000
 天高し八十路二人が峯にゝつ 19911000
 穂芒の波うねうねと芒山 19911000
 秋茄子を嫁にすすめて共笑ひ 19911000
 神有りの出雲の湖はかもめ舞ふ 19911100
 穴道湖の大橋たもと柳散る 19911100
 穴道湖の秋の入口に出合ひけり 19911100
 名菓舗の近くに石焼芋の声 19911100
 鳴き砂を踏めば聞えし秋の声 19911100
 白髪を少しのぞかせ冬帽子 19911200
 もう一度鏡をのぞく冬帽子 19911200
 久に会ふ少しおしゃれに冬帽子 19911200
 諦めもした犬癒えて冬ぬくし 19911200
 独言ならずチロとの話始め 19911200
 愛犬のチロも淑気の尾をふれり 19920100
 年の夜吾より古き茶棚拭く 19911200
 立春大吉吾より古き茶棚拭く 19911200
 名水へ凍ての溪路手をひかれ 19920103
 謡初帯山小さく装ふ同志 19920100
 謡初足のねちりを許し合ひ 19920100

- 保養所で看る東京の雪ニュース 19920200
 お返しを気にする老や冬いちづ 19920200
 大山ははるか田に群る白鳥かな 19920200
 旅帰り待ちくれ紅梅咲き満つる 19920200
 紅梅や吾が色にせむと言ひし亡友 19920200
 梅の闇逢ふ日約せし友逝きぬ 19920200
 旅はずむ卒業進学祝ぎ二つ 19920300
 たまさかの母と息子の旅春の虹 19920300
 春眠の十指はぐしつ今日へ覚む 19920300
 春セーター鏡に肩のうすきこと 19920300
 美しく老いたきものよ柴木蓮 19920400
 シクラメン茶の間笑ひ溢れさす 19920400
 ふる里はすみれたんぽ墓の径 19920400
 桃の花さら前かけの辻地蔵 19920400
 お遍路の憩なる礎石大伽藍 19920400
 菜の花を手いっぱい摘み日毎漬け 19920400
 日々摘めど菜の花畑の黄は濃ゆく 19920400
 花杏真白従妹に甘い気味 19920400
 芍薬の蕾ふくらむ庭の日々 19920500
 発つ朝にうす紅ほのと花水木 19920500
 いそいそと半袖えらび旅立てり 19920500
 山迫る車窓次々藤の花 19920500
 若葉風亡妹の友とめぐり逢ひ 19920500
 短か夜や亡妹の友と泊つ出雲 19920500
 ビール酌むかちんとグラス若やぎて 19920600
 ビール酌むドラマのように共鳴し 19920600
 ビール乾し少し多弁に刻忘る 19920600
 向日葵が君臨空地の草いくさ 19920700
 木樺咲く一日の花の教えごと 19920700
 垣根ばら互の無事を老犬と 19920700
 夕仕度水の出細き大暑かな 19920700
 開け放つ窓に早起き木樺かな 19920700
 酌みもして婿の気配り涼しき鯛 19920700
 倒産の去りゆく一家百日紅 19920800
 一言がちくりと秋の草に棘 19920800
 遠富士の景ある売地草茂る 19920800
 芝生踏む素足に伝ふ今朝の秋 19920800
 新涼や試歩の芝生に笑み交す 19920800
 高階に寝て眺め居り雲の峰 19920800
 霧にまだ眠る町並試歩はげむ 19920900
 夏霧の深し湯の町まだ覚めず 19920900
 回廊に沿ふ白萩に清めらる 19920900

水攻めの城跡や蓮の実の大粒 19920900
 苗木より三年無花果三つ熟れる 19920900
 長生きに想ひいろいろ敬老日 19920900
 秋灯下親しきものは虫眼鏡 19921000
 保養所の昼餉にぎやか大秋刀魚 19921000
 露芝生試歩の目標果し得て 19921000
 秋日和木椅子に一病話し合ふ 19921000
 シャッターを頼む一会や寺紅葉 19921000
 庭園灯淡きに和せぬ木犀の香 19921000
 実梅の香まこと顔して嘘をさく 19920700
 夜の仏間大蜘蛛打ちて逃がしけり 19920700
 耳遠く独りもよしと新茶汲む 19920700
 魂迎ふやがては迎えらるる吾 19920700
 帰省子に一夜越し方きかれけり 19920700
 山荘の富士見ゆ窓に姫りんご 19921100
 夜霧匂ふ同郷なりし荘の主 19921100
 天高し無傷の紺を飛機が割る 19921100
 セーターの赤を鏡に問ふ八十路 19921100
 声高や桜紅葉の女子校道 19921100
 迎えられ娘の柚子風呂の香りかな 19921200
 いさかひが笑ひに母と娘の冬至 19921200

年用意母と娘の声いづれとも 19921200
 部屋に冷ゆ胸像の夫に独り言 19921200
 行く年へ刻む時計に息つめて 19921200
 我が城と正月飾り四畳半 19930100
 繰るほどに夢ふくらみ来初暦 19930100
 二日早帰る子送る母の背 19930100
 好物で老犬はげます寒の入 19930100
 居候の老に朝毎寒玉子 19930100
 老犬と共に留守居す梅日和 19930200
 老犬の背に紅梅の一片が 19930200
 一跳ねに広がる水輪水ぬるむ 19930200
 春立ちぬ川面は白き雲浮かべ 19930200
 白き雲浮かべ川面は春立ちぬ 19930200
 倅せは歯音にありし年の豆 19930200
 今日よりはチロ居ぬ生活春寒し 19930330
 姫こぶし一輪樹下にチロは死す 19930330
 春嵐おさまる朝にチロは死す 19930330
 春寒しピンクの布に巻く屍 19930330
 窓開けばおやつ待つチロ無き余寒 19930330
 従姉妹どち幼な呼びして桃の郷 19930400
 故里や摘みてたちまち木の芽和え 19930400

- 故里はお遍路の鈴あわあわと 19930400
 朧夜や骨までしゃぶる瀬戸の味 19930400
 短夜やはらから集ふ郷言葉 19930400
 老鶯に迎え送られ札所寺 19930400
 仁王門くぐりて見上ぐ余花やさし 19930400
 牡丹や余生つぎこむ花づくり 19930400
 新背広卒業の子を見上げけり 19930400
 祝背広就職といふ巢立かな 19930400
 就職は別れの一つ鳥雲に 19930400
 散華とも霊園しとど花吹雪 19930400
 咲き競ひし源平桃も葉となりぬ 19930500
 藤娘出そう藤房ととのへり 19930500
 三代の旅信濃路を青葉風 19930500
 大手まり真白湯の香の中にゆれ 19930500
 まじり気のなきみどり嶺よ露天風呂 19930500
 峯八分疲れは軽し藤の花 19930500
 からみ合ひ花房乱る深山藤 19930500
 子に植えし桜桃熟るる少女有美 19930400
 遍路憩ふ礎石千年語りつぐ 19930400
 点滴の紫班をさする梅雨の窓 19930605
 明易すや退院といふ別れかな 19930513
- 濃紫陽花点滴の染みうすれゆく 19930513
 錠剤をならべ数えて夕薄暑 19930700
 負け相撲少し頭痛の戻り梅雨 19930700
 連れだちていそいそ母娘浴衣買ひ 19930700
 連れだちて母娘の購む派手浴衣 19930700
 浴衣茶会立居気になる娘を送る 19930700
 月下美人迎へ車で御対面 19930700
 月下美人息を弛めず咲き拡ぐ 19930700
 手伝ひ娘不満あるげに水を打つ 19930700
 咲きましたとて嫁が見す鷺草鉢 19930800
 鷺草の飛びさる舞ひよう目離せず 19930800
 水撒けば陶狸がうれし涙する 19930800
 これはまあ皿をはみ出る初秋刀魚 19930900
 倉裡裏の鬼灯赤し妻若し 19930900
 猫難の子雀放つ秋彼岸 19930900
 雀獲りしかり猫抱く秋彼岸 19930900
 映る影流るる音も水の秋 19931000
 秋晴やいそいそ釣に碁敵と 19931000
 秋晴や碁敵はまた釣がたき 19931000
 釣りし沙魚はねる厨にはや碁音 19931000
 雁渡る双手で握手する別れ 19931000

- 口釜へ増ゆる孫との日向ぼこ 19931000
 柿送る案内電話の郷言葉 19931000
 柳散る入日に染まる湖のほとり 19931100
 五指ほぐすなだむ節おし今朝の秋 19931100
 夜逃げとや閉させる窓に満月光 19931000
 人恋ふかに垣越し延び来青き鳶 19931000
 猫舌は母似亡母恋ふ湯豆腐鍋 19931200
 物言はず一日留守居の師走呆け 19931200
 冬日向売れぬ空地は猫のもの 19931200
 カレンダーも庭も山茶花日々惜しむ 19931200
 柚子ほめてつい佇ち話ただけり 19931200
 留守居して米研ぐ窓に寒宵月 19931200
 大晴れや蒲団干す家干せぬ家 19931200
 爪切りて指美しや賀状書く 19931200
 吹き溜る枯葉の中の紅一葉 19931200
 宵戒押さへ揉まれて娘はきげん 19940100
 ただいまの娘の声弾む宵戒 19940100
 初釜へ晴着見送る母も美し 19940100
 はよ来ませ郷言うれし初電話 19940100
 寒玉子盛りあがる黄身老もまた 19940100
 春寒やもう夢でしか逢へぬ人 19940109
- 頑張れよ愛犬館も初日さす 19940100
 受験子に買ふ知恵袋文殊さま 19940116
 春寒し起ち居いちいち声あげて 19940200
 中古車群旗はたはたと春を呼ぶ 19940200
 猫柳活ける娘もまたつやつやし 19940200
 花葉挿しふと京の友思ひけり 19940200
 再会や土を割り出る花芽たち 19940300
 分葱和へおふくろ味の老自慢 19940300
 名もゆかし若草豆腐のうすみどり 19940300
 点心に一口ほどのたらの芽よ 19940300
 茄子胡瓜畑銀座と故里便り 19940600
 額の花一人で居たき時もあり 19940600
 夏帽子のぞく白髪も好しとして 19940600
 夏帽子年齢をきかれて逆に問ひ 19940600
 山梔子の真白につらき雨つづく 19940600
 青葉風入れてもきれぬ愚痴話 19940600
 言ひたきをたたむくちなし真白なる 19940600
 辻地蔵朝取りトマトにお眼細く 19940700
 暑に耐える白前掛の辻地蔵 19940700
 青田風通し一睡の浄土かな 19940700
 喉走る名水冷えの心太 19940700

- 空暗し呼べば遠退く夕立雲 19940700
 今日も亦他所夕立とそれにけり 19940700
 花合歓や溪の音きく温泉の窓 19940700
 含羞草いで湯泊りの老四人 19940700
 故里は金比羅歌舞伎花の山 19940400
 岐れ道ミモザ盛りの島巡り 19940400
 一言の棘のいたみや夏薊 19940700
 一言の棘に猛暑の雲みあぐ 19940700
 風鈴や窓辺に母と娘の笑顔 19940700
 昼寝覚めまだ侍り猫伸びきって 19940700
 シルバーホーム笑ち会釈して廊下 19940800
 お元氣ねきれいに食べし夏料理 19940800
 西瓜割漢につづく娘が果す 19940800
 踊の輪みるみる三重に炭坑節 19940800
 高階に眼覚めてわっと雲の峰 19940800
 熱帯夜慣れて別れのなにとなう 19940800
 朝涼や肩まで掛けてふと淋し 19940800
 雲の峰息子は太平洋の空ならん 19940800
 満月や仰ぎし友はいま筑紫 19940900
 月白やせり上り待つ大舞台 19940900
 手折り来て芒挿しくれホーム友 19940900
- 敬老日過ぎて忘れを託ぶ息子かな 19940900
 夕木槿一日思案し言ふまじと 19940900
 傷つけしことに氣附かず青芒 19940900
 押し分けも背伸びもなくて草の花 19940900
 侘びて住むごと庭隅の時鳥草 19941000
 住むは誰隣の芒刈られけり 19941000
 息子に目立ちきし白きもの柿をむく 19941000
 高階に泊つ霧ぬれの大夜景 19941000
 秋灯に左傾ぎの寿百の字 19941000
 ふる里や菜飯に小芋の煮ころがし 19941100
 大根抜く厨に待つはおろしがね 19941100
 木あがりの茄子見落さず芥子漬 19941100
 木あがりの茄子と思へぬ芥子漬 19941100
 そつと出る夫追ふ妻や露の畑 19941100
 医と寺の娘が幼な友木の葉髪 19941100
 秋風や札所の寺の大礎石 19941100
 木犀匂ふ金銀並びし故里の庭 19941100
 着ぶくれて椅子のくぼみに孫自慢 19941200
 ほほえみで答ふ遠耳冬すみれ 19941200
 言ふだけを言ふてコート忘れ物 19941200
 爪切りて指美しく賀状書く 19941200

- 保養所の握手の別れ紅葉散る 19941200
 晩菊にそとさよならをしばし旅 19941200
 物忘れめつきり増えて年の暮 19941200
 晩菊の一本供花とし剪りにけり 19941200
 補聴器を切りて一人の冬の夜 19941200
 ほんのりと米寿の頬に屠蘇の紅 19950100
 倅せは初夢もなき深眠り 19950100
 住連飾りドアーにかけて十二階 19950100
 開かんと冬薔薇秘めし力かな 19950100
 梅一輪いちりん日々を留守居して 19950200
 倅せや日々の留守居に梅一輪 19950200
 紅梅や白磁揃ひの朝餉の膳 19950200
 話す日々米寿祝の冬ばらに 19950200
 毛糸解く編み直されぬ過去てふもの 19950200
 春寒し幼なに戻るおないどし 19950200
 空地占め空の青吸ひ犬ふぐり 19950300
 椀に浮くさみどりを吸い春一番 19950300
 朝桜夢のあと追ふ思慕の人 19950300
 聞くだけで事情を愚痴の春炬燵 19950300
 躓きて掌をつくところ土筆んば 19950300
 躓きて土筆三本折りて詫ぶ 19950300
- 雪柳白壁拒み闇寄せず 19950400
 白壁の汚れはじらふ雪柳 19950400
 ワインの栓ぼんに拍手や夜はおぼろ 19950400
 花は葉に母の素直は息子の憂ひ 19950400
 応えなく平寝落ちしよ花疲れ 19950400
 落ち椿さつさと主掃きにけり 19950400
 兄弟が初鯉のぼり揚げにけり 19950500
 母の日に娘二人の遠電話 19950500
 母の日や六十年を母の道 19950500
 岐れ道えらべば険し果の余花 19950500
 試歩のぼす思ひたがわず藤の花 19950500
 絵タイルの道若やぎて地球の日 19950500
 高きほど大揺れてをり夾竹桃 19950600
 雑草の茂りたくまし子もたくまし 19950600
 草いくさ陣地広げし青芒 19950600
 葉を研ぎて陣地広げむ青芒 19950600
 職退くも余生と言へぬ梅青し 19950600
 娘名で忌の案内状梅雨じめり 19950600
 海の風山の風入れ夏座敷 19950700
 夕木槿汚れなき白閉じにけり 19950700
 春秋を裾にひろげて讃岐富士 19950700

- はいはいと重ねてさびし含羞草 19950700
 眠り草ねむらぬ葉あり反抗期 19950700
 装ひし遠き日のあり薄衣 19950700
 咲き満つもなほあわあわと花みずき 19950700
 花水木乙女の恋の物語 19950700
 故郷発つ朝採りトマト重すぎて 19950700
 傷つけしこと気付かずや青芒 19950800
 やさしくも棘ある言葉夏薊 19950800
 夏痩せを知らずに生きて米寿かな 19950800
 掌中の珠とはこれよ白桃むく 19950800
 無花果を鳥につつかれ犬叱る 19950800
 新涼や又取り出して読む佳信 19950800
 爽やかや返書のペンのよくすべり 19950800
 鳥わたる返書に三色ボールペン 19950800
 露けしや二人の友の新佛 19950800
 コスモスに手をふる急行待避駅 19951000
 秋夕焼こつくりさんの道標 19951000
 出ぬ電話そうか今宵は月の句座 19951000
 家の味継ぎて伝えて祭ずし 19951000
 貰ふなら遠慮はすまじ秋茄子 19951000
 栗むくや消えぬ弟の国訛 19951100
- 故郷もつ倅せしかと柿をむく 19951100
 文化の日遠き明治の今日生れ 19951100
 透きとおる秋や少年ハーモニカ吹く 19951100
 鯛雲告げたき人は遠く住み 19951100
 いま倅障子をよぎる鳥の影 19951200
 山茶花や豆腐屋を待つ留守居役 19951200
 冬桜口紅うすくひく米寿 19951200
 騙されてをれば事なし枯尾花 19951200
 梅ヶ枝の終の一葉の散る別れ 19951200
 いつまでも御元気でねてふ賀状の数 199601
 退職と一筆添へし賀状かな 199601
 初入日三六六の一を呑み 199601
 ページくる吾が音寒し影寒し 199601
 小豆粥老ひてすこやか姉弟 199601
 春寒し言はでききをり二度話 199602
 鳥は雲に二度行くスーパ―買いわすれ 199602
 梅二月八十路わきまふ笑顔よき 199602
 娘等去にてかろき疲れに窓の梅 199602
 よきことを知らず娘の声梅紅し 199602
 芽吹く庭健かと木々に呼びかけて 199603
 鳥雲に謝しつつつ辛き車椅子 199603

鶯やに車椅子停めくれ息子よ	199603	暑からむ遅れて浴びる百視線	199607
とてせめて電話は春の声	199603	端居して出世無縁の長寿眉	199607
春彼岸弟訪ひくれ仏顔に	199603	暑に耐えし頬なでてみる今朝の風	199608
岬うらら成果一尾の小半日	199604	秋暑し訪問販売二度のブザー	199608
春の夕餉釣りし一尾を母の前	199604	夜々うれし子の友に賜ぶ古梅酒	199608
快気とはかくもうれしき春の朝	199604	花火見に橋へ子が押す車椅子	199608
春光やを拝み浴びをり癒え兆	199604	癒へてつくる迎え送りの盆団子	199608
怪端の小さき笑顔犬ふぐり	199604	白萩や見知らぬ同志笑みかわし	199609
鯉のぼりたーかく揚げて待つ帰国	199605	寺育ち白曼珠沙華燃え知らず	199609
日本を知らぬ児を待つ武者飾り	199605	風やさしコスモスやさし車椅子	199609
薔薇咲かせ迎え明るき指圧院	199605	思はざる花つけにけり秋の草	199609
土産地露香りひろげて国言葉	199605	秋冷ゆる友の情の京しるこ	199609
木の芽雨偲び草とて届く茶器	199605	故里や出会ふたれかれ野菊晴	199610
片隅に生きる幸せ額の花	199606	栗むきつ老ひて姉弟郷言葉	199610
新茶くみほめ言葉待つ母の顔	199606	風のまま吾も白髪穂亡や	199610
草茂る逆らはぬこと牙につきて	199606	花は実の色増す石榴日々親し	199610
明易やドイツ転勤ききしより	199606	急げともあわてるなとも虫の鳴く	199610
泰山木朽ちてすがれる花かなし	199606	天高し卒寿見上ぐる明治晴	199611
朝涼やからっぽ頭からっ腹	199607	秋深き豆煮る母のひとり言	199611
いぎ昼寝今日はいづこへ夢の旅	199607	冬に入る病上手に付き合わす	199611
夕涼し肌になじみし藍の服	199607	いつまでも娘は子こたつの母苦言	199611

- よろこびにふとある怖さ夕紅葉 1966/11
 熟柿つるつと食べばふるさと近く来る 1966/12
 枝桜紅葉に告ぐ別れ 1966/12
 落葉掃きつい長くなる隣同志 1966/12
 やがてこの娘が孫の嫁冬いちぢ 1966/12
 雲を割る冬日や老のねがふこと 1966/12
 お元旦老母くり返すありがたや 1967/01
 しわのなき黒豆に老母初お箸 1967/01
 初写真嫁孫の笑み三代 1967/01
 愛犬と話す日日あり寒日和 1967/01
 翔ばたいて大きなおまへ初からず 1967/01
 五十年忌白梅古りし月日かな 1967/02
 孫嫁のもうすぐ二人梅紅し 1967/02
 お化粧で他人顔なり春写真 1967/02
 春障子四畳半の城明るし 1967/02
 下萌に煎餅分ける愛犬に 1967/02
 春耕をまぶしく見をりホーム窓 1967/03
 啓室やシルバーホームの預け解け 1967/03
 春暁の正夢なれや初ひ孫 1967/03
 向ひ合うパソコン句帖春炬燵 1967/03
 おばさんと呼びくれ三人桜餅 1967/03
- 浮雲に名付けあそびや春の風 1967/04
 こちら向くラッパ水仙こんには 1967/04
 花衣車椅子にも湧くはずみ 1967/04
 思い桜樹齡二百を恋う卒寿 1967/04
 花の雨ワインケーキの香に和む 1967/04
 初咲きの大勺や句や婚の朝 1967/05
 桜湯のぱーつとひらけり控室 1967/05
 純白の花嫁孫となる五月 1967/05
 柿若葉秘仏開扉めぐり会い 1967/05
 来し道の険しさ言はず余花仰ぐ 1967/05
 御幣上る薫風にのる上棟歌 1967/06
 目つむりて青汁ぐつとばら真紅 1967/06
 痛いとは生ける証しか梅雨の膝 1967/06
 梅雨鏡拭けば亡母にとれほどに 1967/06
 都忘れ咲かせ老いけり京遠く 1967/06
 今年また梅酒たまわる命かな 1967/07
 子つばめの翔つを見送る車椅子 1967/07
 ナイターに興じる老母の片辺して 1967/07
 白髪といていのちあるもの髪洗ふ 1967/07
 ぎょうさんの娘の悲鳴蜘蛛の糸 1967/07
 郷ばなしつぎずやさしき団扇かぜ 1967/08

夏服の派手を鏡に息子の土産 1997/08
きれし夢惜しや貴船のはも料理 1997/08
迎はるる仏とならで魂迎ふ 1997/08
仏めく盆僧の額黒光り 1997/08
赤とんぼヘルパーと唄う車椅子 1997/09

星月夜シルバーホーム消灯はやき 1997/09
誰似かと爽やかろんぎ初曾孫 1997/09
白桔梗時には欲しい母小言 1997/09
おきし手を又も引きよす枝豆を 1997/09

第3章 母お気に入り句

端居して出世無縁の長寿眉

199607

この句は四国の故郷で読む故郷は香川県高松市国分 で、従弟の村上勝美宅を宿としていた。そこで村上勝美氏の眉を読んだ句。京鹿子の特選賞となり、数ページの誉め言葉があった。端居の季語は夏である。

初入日三六六の一を呑み 199601

三六六は閏年からくる。1996年は閏年だった。ひねった句。

臘夜や骨までしゃぶる瀬戸の味 19930400

四国高松で従弟の村上久夫さんに 鯛の兜煮 をご馳走になった。骨までしゃぶる は京鹿子の海道主宰から手紙で「骨までしゃぶる 全く感心いたしました 故郷はよいもの 良」と。故郷のあるものは倅ですね と

啓室やシルバーホームの預け解け 1997/03

1997年2月に。私と喜美子と清子さんの3人で ドイツ デュッセルドルフの郷生のマンションに10日間泊った。その間 母を湘南台の老人ホームに預けた。その帰国が丁度〰月上旬だったので。

春暁の正夢なれや初ひ孫 1997/03

清子さんが千里を懷妊したとの知らせをめでて。

第4章 年表

ふみ子略歴

明治四十三年 名古屋で大川清長女として誕生

大正九年 高松女学校入学

大正十四年 京都女子専門学校入学

卒業後一時故郷で先生をしていたが

ほとんど京都で下宿生活

昭和九年 太三郎と結婚

昭和十一年一月 大阪長柄にて竹四郎出産

昭和十一年九月 太三郎死去

昭和十九年 強制疎開で相川に越す

昭和二十年 終戦

昭和二十五年 相川文具店開店

昭和四十八年 俳句始める

昭和五十七年 水無瀬マンションに越す

昭和六十三年 鵜沼に越す
平成九年九月他界

年表

年号	西暦	句数	すまい
昭和四十八	1973	3	相川店
昭和四十九	1974	11	相貝店
昭和五十	1975	15	相川店
昭和五十一	1976	16	相貝店
昭和五十二	1977	17	相貝店
昭和五十三	1978	17	相貝店
昭和五十四	1979	26	相貝店
昭和五十五	1980	29	相貝店
昭和五十六	1981	78	相貝店
昭和五十七	1982	40	水無瀬
昭和五十八	1983	37	水無瀬
昭和五十九	1984	45	水無瀬
昭和六十	1985	39	水無瀬
昭和六十一	1986	41	水無瀬
昭和六十二	1987	45	水無瀬
昭和六十三	1988	49	鵜沼

平成元年 1989.58 鵜沼
 平成二年 1990.57 鵜沼
 平成三年 1991.57 鵜沼
 平成四年 1992.69 鵜沼
 平成五年 1993.75 鵜沼
 平成六年 1994.74 鵜沼
 平成七年 1995.67 鵜沼
 平成八年 1996.38 鵜沼
 平成九年 1997.45 鵜沼 十月歿す

句日記に登場する人々の紹介（敬称略）

・女学校のクラスメート

増田君子、小木原清子、生島孝子、小汐逸子、伊藤カネ、豊辺幸子、請川カツ

・女専のクラスメート

前田のぶこ、浅野房子、磯川きよこ 高田ヨシ子、高橋法子、藤本悦子、池内よしえ、吉川美佐、塩見よしこ、山下光子、佐久間静子、小林ふじ

・相川文具店の関係者

細井輝雄 細井恵美子 細井整 青山さん

・家族

福井百合子（長女）、笹倉聖子（次女）、飯田不二子（三女）、吉川竹四郎（私）、喜美子（竹四郎の妻）、直紀（孫竹四郎の長男） 郷生（クニオ 孫 竹四郎の次男）

・親類

大川一善（弟） 大川安子（妻） 千田和彦（甥） 千田多香子 千田香代子 千田敏夫（甥） 村上久夫（従弟） 村上勝美
（従弟） 大川一幸（従弟） 笹倉温子（聖子の娘） 福井陽子（百合子の娘）

あとがき

母は句集の出版を望んでいなかったのですが、横山実習室に放置したままだったが、<http://www.geocities.jp/takefumi1604/index.html> 横山実習室へはいまでも「横山実習室 検索」で入れるがヒットしたのには私の身辺整理に一環として このノートの添え書き部分も TEXTファイルにしてみた。 鵜沼 句日記執筆がヒットしたのには驚いた。 かつては「ネツ」で検索すると「大月夜唐招提寺の庭にネツ」平成三十年四月から始めて 3ヶ月 かかった この本を印刷するつもりはないが、pdf で配布できるようにしたのが私の役目だった 1000句のなかで 母おきにいりの句を 第3章にまとめてみた。 そのなかで

端居して出世無縁の長寿眉

を代表作としたい。

平成三十年七月

吉川竹四郎

あとがき2

母 吉川ふみ子のメモランダム

ついにくるべき日がきました。年に不満はないというかもしれませんが、昨日の別れは残念でした。享年90才でした。リウマチで手足の痛さに苦しんでいた2年でしたが、10月6日クモ膜下出血で一瞬にして昏睡状態に陥り死の苦しみは望みどおりになりました。

私と母とのつきあいは61年で、私の知らない母の前半生を私に話してくれるかともわずかになりました。

母は大川清 きくえの長女として、名古屋で生まれました。清が医学生で、名古屋で住んでいたのです。しかし香川県綾歌郡端岡村国分で医者 of 長女として育ち、延子、貞子、清一、一善と続きます。一善叔父とは19も離れているから親のような姉でしょう。高松の県女から京都女専に進みます。清は医者 of 養子を母に期待したのと、縁遠うかったのとで、27までハイカラ生活をしていました。わたしに麻雀や花札を教えたのもそのころの生活のせいでしょう。

父吉川太三郎との結婚は昭和9年、私の誕生は昭和11年1月、太三郎没が11年9月8日ですから、2年間の結婚生活でした。淀の水女学校と此花商業の私学を経営する父との結婚は1回の見合いで決めたやけくそ気分だったようです。太三郎の父竹三郎、妻いと、百合子（14才）、聖子、不二子、正三、武雄、千代造、綾子、の在所帯のきりもりが始まるのはあの性格のせいでしょう。この舞台が大阪の長柄です。戦争中の昭和19年に強制疎開で、

相川に移ります。その頃第一善、従兄弟の一幸さんが下宿していました。

売り喰い生活も底をつき昭和25年、相川文具点を始めます。最初はお茶と文具でした。文具には丸亀の田岡屋が参考になった。その前に終戦で戦地から帰ってきた叔父たちと吉川製釘所をいまの新大阪駅の真下で始めますが、失敗します。

正三、武雄、千代造、綾子、百合子、聖子、不二子の内武雄は恋愛でしたが他はすべて見合いでその取り仕切りはプロ級です。

私竹四郎の扱いは特別でした。四国からの女中さんを付けたり、甲南中学へ通わせ、大学時の京都に下宿させるなどなど。私への期待が大きかったのは、私にとってはプレッシャーでしたが、高校2年の時に発病した肺結核の病弱であきらめもあったようです。卒業後は大学の先生にも考えましたが、薬の進歩で元気になり就職することになり、日本初のコンピュータ（東京の三菱原子力）に決まり、昭和37年に上京する時は時自分の行動範囲が増えると言って反対しませんでした。細井さん、青山さん、和彦さんらの店の人たちとの生活は34年頃から始まります。

相川の家処分、水無瀬のマンションの売買、土地の切り売り等の不動産の売買時の慎重な判断はまわりから親分扱いされたようです。

ここ藤沢に私達が移ったのは昭和62年秋、母は水無瀬をたんで63年に、この部屋で暮らします。友達がおおく、女学校のクラスメート、女専のクラスメート、成蹊短大の生徒さん、店の文具関係、僕の友達（私とは音信不通）、親類付き合いなど年賀状、冠婚葬祭の贈答の律儀さは明治女です。最後に浄土真宗の信心は俳句と並んで特筆に値します。この母が極楽にいつていないはずは有りません。希望どうりに長柄のお墓に60年遅れで太三郎の横に寝かしてあげます。

合掌